

2025/7/3 三重大大学附属中学校公開研究会

「総合的な学習の時間」を軸とした カリキュラムマネジメントに向けて

八田幸恵（大阪教育大学）

shatta@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

講演を進める問い

(1) 「総合的な学習の時間」でこそ実現すべき「探究」とはどのようなものか？

- (1-1) ナマに触れる・やってみる学び
- (1-2) familiarをstrangeにする学び
- (1-3) 問いを生成する学び

(2) なぜ「総合的な学習の時間」が、カリキュラムマネジメントの中核に位置付くのか？

(3) なぜいま教科と総合において、「探究」がキーワードになっているのか？－教科と総合の関係史

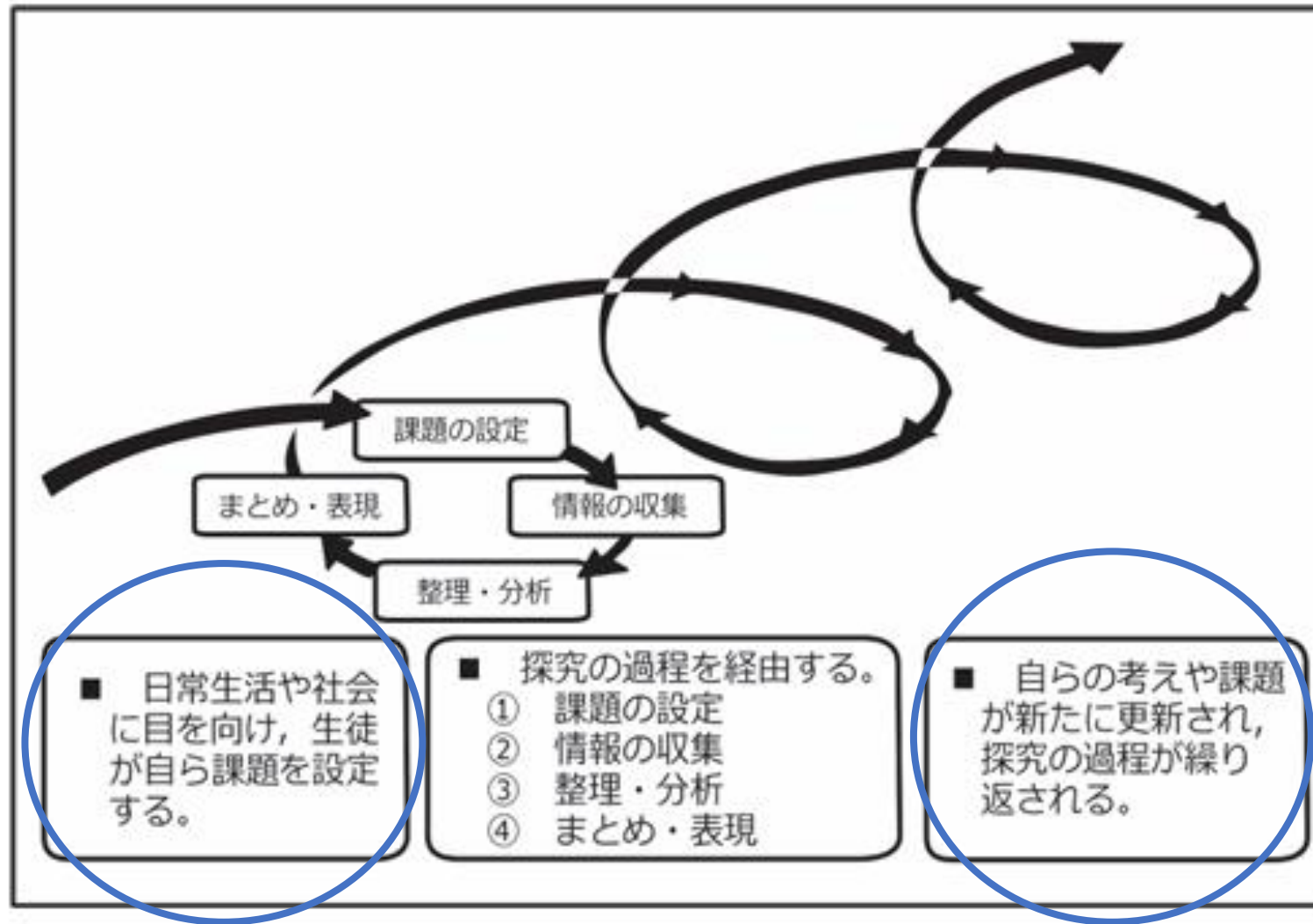
- (3-1) 2000年代まで 三つのタイプ
- (3-2) 2000年代の教育改革と「探究」のキーワード化

(1)

「総合的な学習の時間」でこそ実現すべき探究とはどのようなものか？

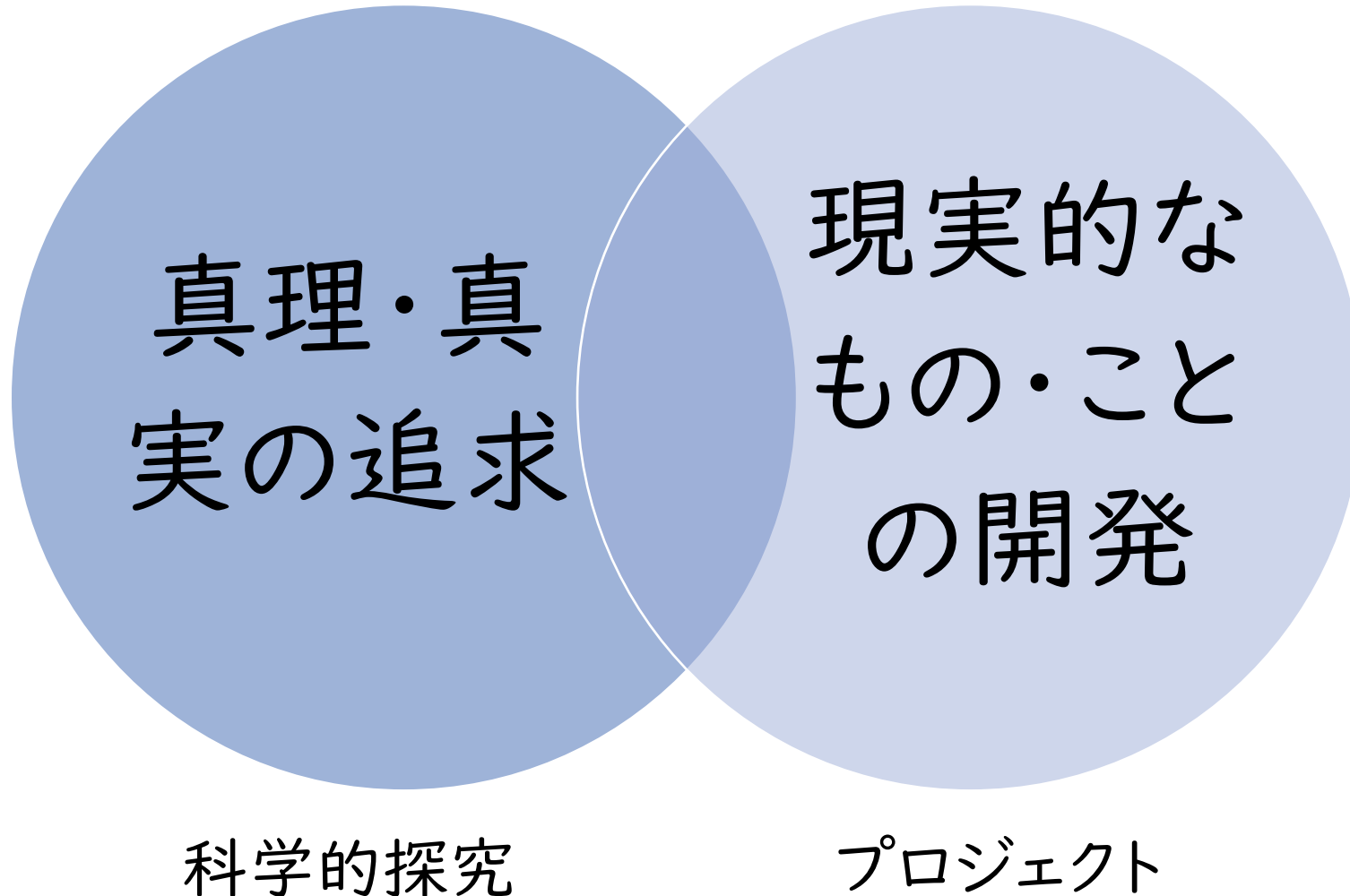
「総合的な学習の時間」と探究的な学び

探究的な学習における生徒の学習の姿



【総合的な学習の時間編】中学校学習指導要領（平成29年告示）解説

現在の「総合的な学習の時間」における 探究的な学習に見られる二つの類型



- 実社会の問題を解決するために、ものやことをつくることを通して、知識や資質・能力を身に付けていく学習形態

例)

高専のロボコン

大学生による駅前活性化プロジェクト

学習指導要領を解きほぐす

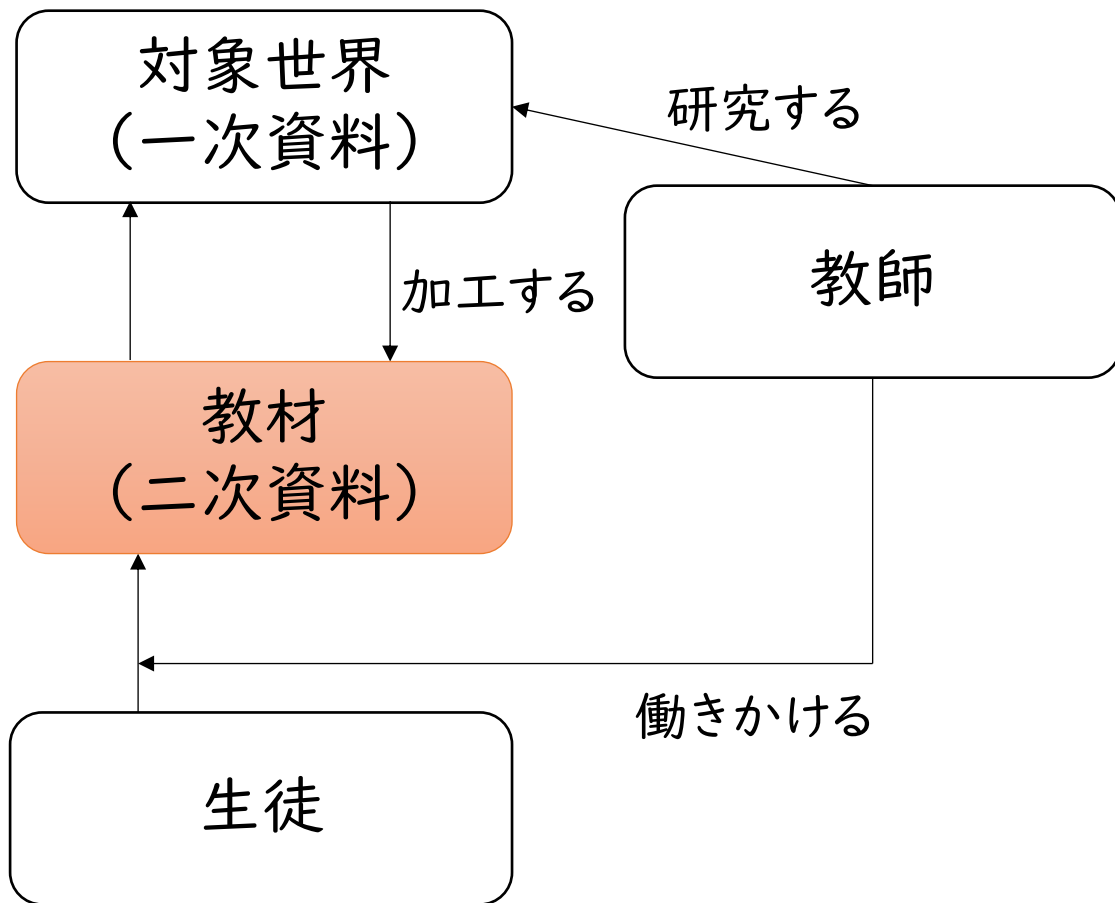
- 「総合的な学習の時間」における探究的な学びについて、学習指導要領では、以下のように提案
 - ①日常生活や社会に目を向ける
 - ②生徒が自ら課題を設定する
 - ③自らの考えや課題が更新され、探究の過程が繰り返えられる
 - 探究のサイクルを回していれば、探究したことになるのか？
 - 必ず社会に目を向けなければならないのか？
 - 社会に目を向けてさえいればいいのか？
- 字面ではなく、本質を解きほぐしてみよう

(1-1)

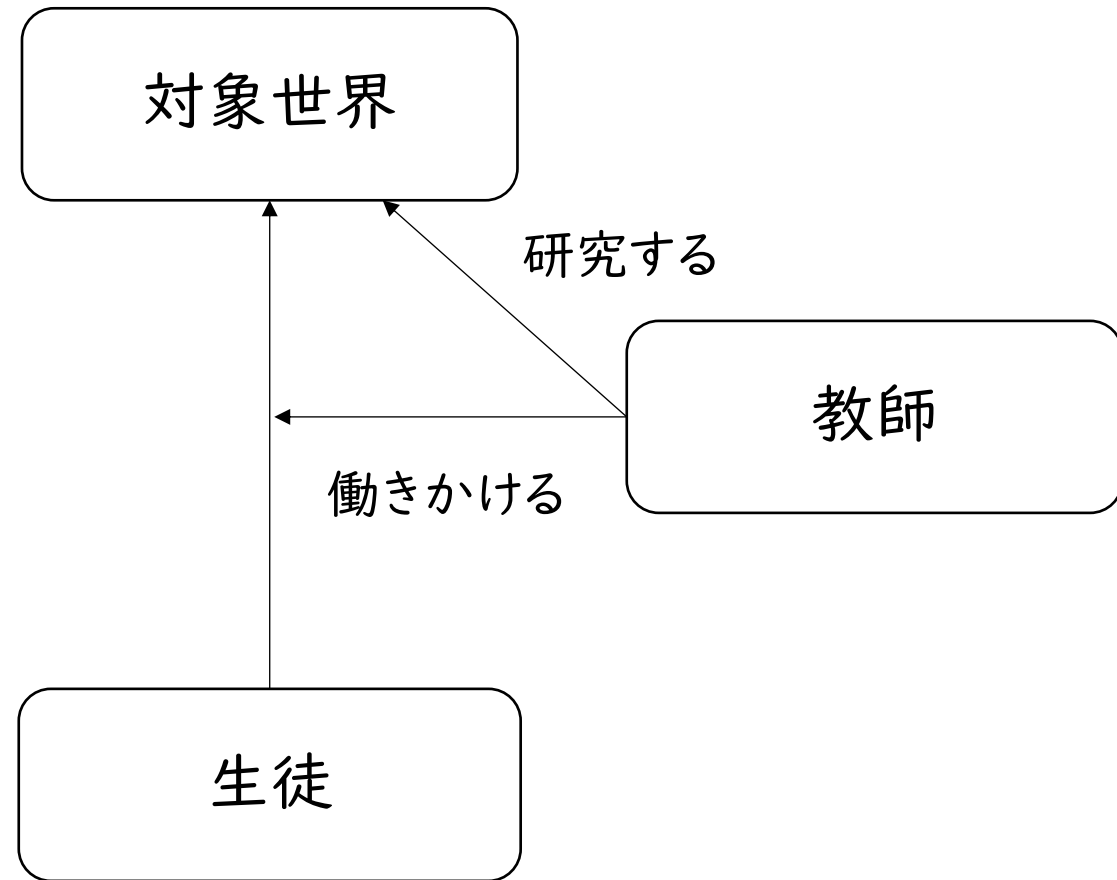
ナマに触れる・やってみる
学び

ナマに触れる・やってみる学び

教科



総合的な学習の時間



※「総合的な学習の時間」においても、誰かが作成した二次資料を通して対象世界を研究してしまっている例がある

ナマに触れる・やってみる学び 高校生の場合

カカシの効果検証

福井県立若狭高等学校

1 背景

近年鳥獣被害が全国的に問題となっており、農業の被害総額は（平成30年度）158億円にものぼっており、福井県でも被害が深刻である。現在各市町で防護柵や電気柵の設置などの対策が行われているが、福井県では（平成30年度予算）年間約5億5千万円もの税金が対策費用としてあてられているため、私たちは低コストで昔から鳥獣被害対策として使用されてきたカカシに抑止効果があるのかを検証することとした。

2 目的

カカシの設置による抑止効果を検証し、それによる鳥獣被害対策のコスト削減とした。

3 仮説

カカシは少なくとも江戸時代から鳥獣対策として使用されてきたため、鳥獣に対して農作物を守る効果があるのではないかと考えた。

5 実験結果

野菜を設置した日から捕食された日までの日数の関係をグラフに表した。（図3）

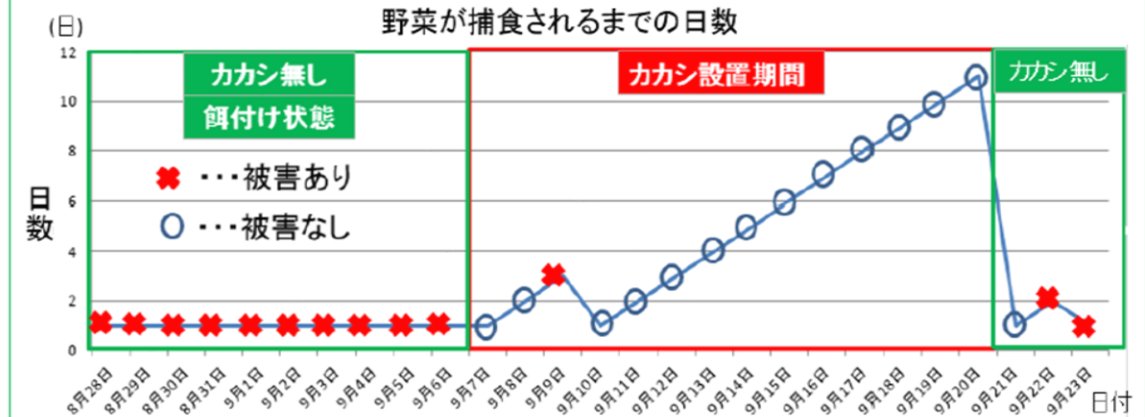


図3 野菜が捕食されるまでの日数

- ① 8月28日～9月6日（9日間）

野菜が翌日には跡形もなく消えており、獣の足跡が残っていた。（図4）餌付け状態となった。

- ② 9月7日～9月9日（3日間）

カカシを設置した。3日後に捕食されたが野菜の食べ残しがあり、（図5）獣の足跡は確認されな

ナマに触れる・やってみる学び 高校生の場合

福井県立若狭高校 2023年 普通科 1年生の中間発表資料

うめぼし克服大作戦

若狭高校普通科1年

3名でのグループ探究

主な活動

- ・梅干しを色々な種類の液体につけた



試食



Q なぜ液体につけたのか

- ・青梅の収穫時期は6月
- ・梅干し最低でも二ヶ月

梅干しを作る過程で
手を加えるのは難しい



身近にあるもので酸っぱさが緩和できたら、
苦手な人でも簡単に試すことができる



つけた液体の性質

酸性	中性	アルカリ性
〈第一回〉 ・酢 ・野菜ジュース ・かぼす ・醤油 〈第二回〉 ・飲むヨーグルト ・ソース ・ごま油 ・カルピス ・ポン酢 ・マヨネーズ (・ケチャップ)	〈第一回〉 ・豆乳 ・お茶 ・はちみつ ・コーヒー ・シャンタン ・バター ・ヨーグルト ・キムチの汁 ・牛乳 ・コンソメ 〈第二回〉 ・みりん ・ココア ・めんつゆ ・生クリーム ・アイス ・カスタード	〈第一回〉 なし 〈第二回〉 こんにゃくの汁 (食べてない)



ナマに触れる・やってみる学び 小学生の自由研究の場合



ナマに触れる・やってみる学び 小学生の自由研究の場合

石田三成の旗印は、本当はどれが正しいのか？

→石田三成陣の旗や甲冑の実物を展示している博物館を探しつつ、
複数の城や博物館に関ヶ原合戦図屏風を見に行く

→人に聞く

現代において、石田三成の旗印はどれくらい多様に書かれるのか？
媒体によって傾向はあるか？

→石田三成の旗印が描かれた、現代の出版物をたくさん集める

→人に聞く

石田三成の旗印が多様に描かれる理由について、人はどんな仮説
を立てるのか？

→多様な人々に聞く

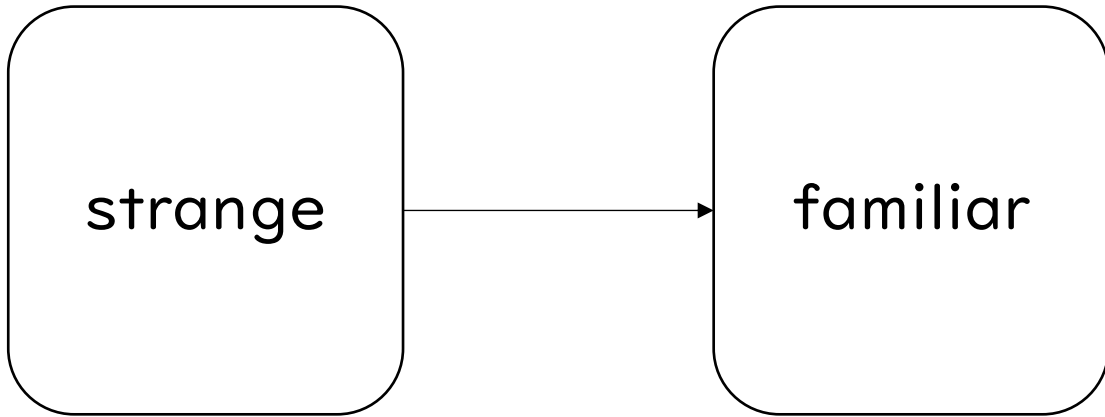
一次資料の変化と問いの変化

(1-2)

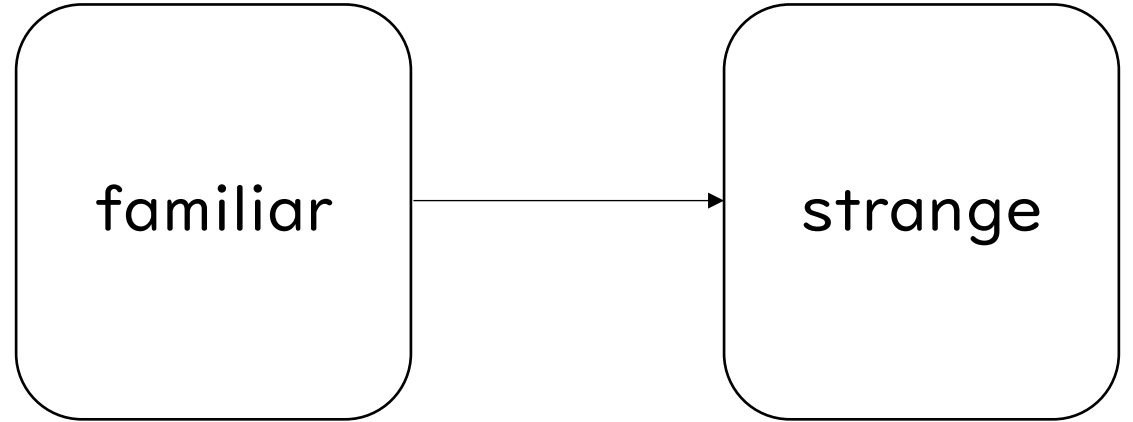
familiarをstrangeに
する学び

familiarをstrangeにする学び

教科



総合的な学習の時間



(宮崎清孝『総合学習は思考力を高める』一荃書房、2005年)

※「総合的な学習の時間」において、familiar → more familiarになっている例がある

※教科においても、familiar → strange が実現している例がある
例) 俳句の創作、「水を描く」

familiarをstrangeにする学び

総合的な学習の時間

familiar

- ・カカシは農作物を鳥獣被害から防ぐために立てられている
- ・人の形であることが重要である

strange

- ・鳥には効かないのでは？
- ・人の形ではなく、匂いが重要なのではないのか？

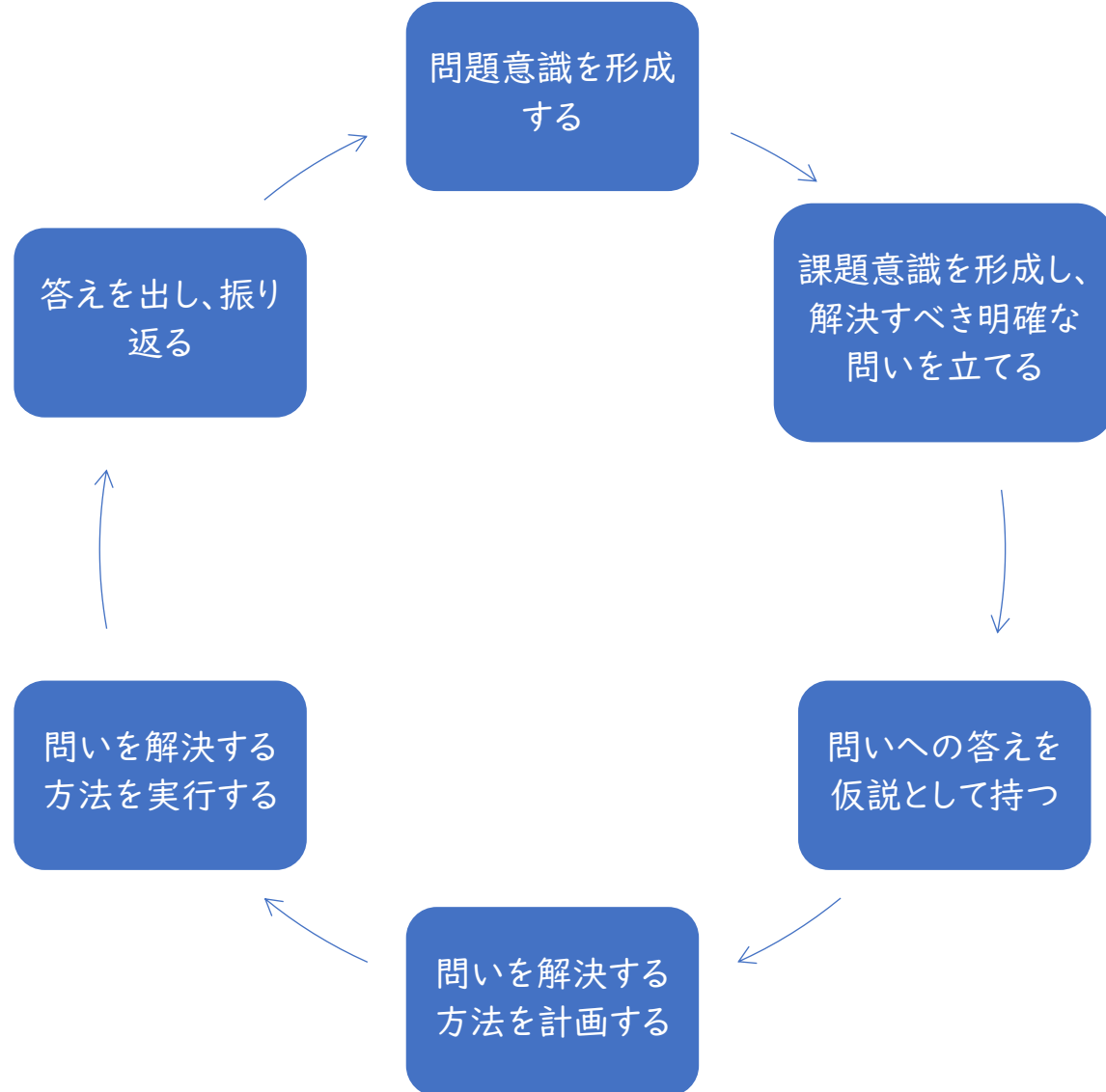
familiarをstrangeにする学び

- 大阪府下の中学校3年生
 - 国語「俳句をつくろう」
 - 本時の目標：良い俳句は「読者に共感と驚異をもたらす」ということを理解する
家族とは濡れし水着の一緒くた 小池康生
 - 活動：
この恋は（ ）より永く 矢野玲奈
（ ）に入ることばを考えよう
- 俳句の詠み手の目で世界を見るとstrangeに見える

(1-3)

問いを生成する学び

問いを生成する学び



- 探究の問いは、探究のサイクルを回す過程で、後から生まれてくる
- 最初に立てた問いに固執しない方がいい

問いを生成する学び 高校生の場合

	問い	タイプ	先生による声かけの例
×	大船渡の福祉の問題について知りたい	漠然型	具体的に?どんな問題?福祉の問題って何?それって人に聞かなきゃわからないの?
△	大船渡の福祉の問題について、独居高齢者にどんな課題があるのか知りたい	対象明確 課題漠然型	あなたはどんな課題があると思うの?その課題に取り組んでいるのは誰(どこ)なの?それって本当に人に聞かなきゃわからないの?
○	大船渡の独居高齢者に他者とのつながりを得る機会を提供するため、行政はどんな取組をしているのか	課題明確型	あなたなら何ができる?本当にそこに行けばわかる?それって本当に人に聞かなきゃわからないの?なぜ取材先がそこ?
◎	大船渡の独居高齢者が、他者とのつながりを得るためにサロン活動をしてみたい。行政でも実施してはどうか	課題解決型	なぜ取材先がそこなの?本当にそこに行けばわかるの?なんでそれができると思うの?本当に効果があるの?

問いを生成する学び

大学生の卒業論文の場合（10年前）

4月段階の問い	公文式はいいのか悪いのか？自分自身公文式を習ってきたし、指導員としてバイトしているけれど、公文式がいいのか悪いのか、もやもやする。幼児教室まで開くようになったし、世界進出もしている。なぜこんなに広まったのか？何をどうアピールしているのか？何が受けているのか？公文の生徒はどう感じているのか？
～6月までの指導	・時代ごとの社会的背景や学校教育の特徴との兼ね合いで公文式が広まったとみて、その兼ね合いの具体的な様相を探るのか？（教育社会的アプローチ） ・それとも、公文式で子どもがどう育つのかについての公式見解を時系列に沿って整理し検討しながら、実態を調査するのか？（教育方法学的アプローチ）
7月の指導	・アプローチは教育方法学、テーマは学力論 ・論点は？ ・「わかる」と「できる」の関係について考えたいのか？ ・「知識・技能」と「態度」の関係についての考えたいのか？（「知識・技能」を反復練習して十分に習熟すると「態度」「学習習慣」が育つという考え方を検討）
9月卒論中間発表の課題設定	公文式は「知識・技能」を反復練習して十分に習熟ことにより「態度」「学習習慣」が育つという主張を1990年代から行っており、それが幼児教育や世界進出の鍵となったが、その主張は妥当か？教育方法学における学力論の知見を踏まえるとともに、元公文生へのインタビューを通して実態調査を行い、その妥当性を検討する。

(1) まとめ

- 「総合的な学習の時間」で実現すべき探究的な学びについて、学習指導要領では、以下のように提案
 - ①日常生活に目を向け
 - ②生徒が自ら課題を設定する
 - ③自らの考えや課題が更新され、探究の過程が繰り返えられる
- 学習指導要領の字面ではなく本質を解きほぐして、「総合的な学習の時間」で実現すべき探究的な学びを以下の3つと考えると、生徒の実態がはっきりと見えるのでは？
 - ①ナマに触れる・やってみる学び
 - ②familiarをstrangeにする学び
 - ③問いを生成する学び

(2)

なぜ「総合的な学習の時間」
が、カリキュラムマネジメント
の中核に位置付くのか？

「総合的な学習の時間」の目標

第1 目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようになる。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

「総合的な学習の時間」の目標

1 目標

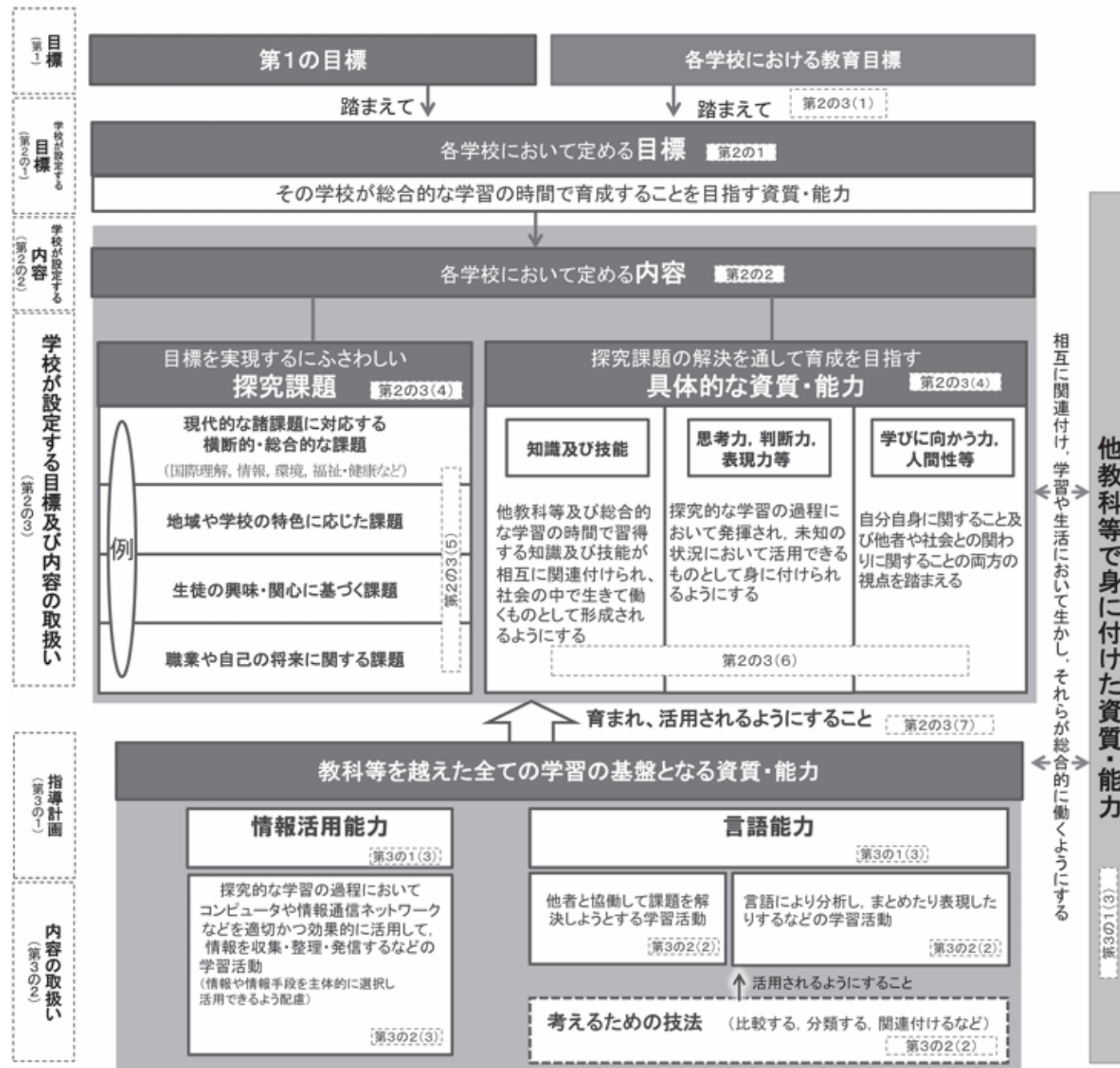
各学校においては、第1の目標を踏まえ、各学校の総合的な学習の時間の目標を定める。

各学校においては、第1の目標を踏まえ、各学校の総合的な学習の時間の目標を定め、その実現を目指さなければならない。この目標は、各学校が総合的な学習の時間での取組を通して、どのような生徒を育てたいのか、また、どのような資質・能力を育てようとするのか等を明確にしたものである。

「総合的な学習の時間」の目標を 各学校が定める理由

- ①各学校が**創意工夫**を生かした探究的な学習や横断的・総合的な学習を実施することが期待されているからである。それには、地域や学校、児童の実態や特性を考慮した目標を、各学校が主体的に判断して定めることが不可欠である。
- ②**各学校における教育目標**を踏まえ、育成を目指す資質・能力を明確に示すことが望まれているからである。これにより、総合的な学習の時間が各学校のカリキュラム・マネジメントの中核になることが今まで以上に明らかとなった。
- ③**学校として教育課程全体の中での総合的な学習の時間の位置付けや他教科等の目標及び内容との違いに留意しつつ、この時間で取り組むにふさわしい内容を定める**ためである。このように、各学校において総合的な学習の時間の目標を定めるということには、主体的かつ創造的に指導計画を作成し、学習活動を展開するという意味がある。

第4章 総合的な学習の時間の構造イメージ（中学校）



【総合的な学習の時間編】中学校学習指導要領（平成29年告示）解説

(3)

なぜいま教科と総合において、
「探究」がキーワードになっているのか？—教科と総合の関係史

「総合」に込められた問題意識

他教科分立カリキュラムでは、統一した人格を形成できないのではないか？

カリキュラムを統合する方法が必要ではないか？

子どもたちの学びを活性化するために、生活や経験をもっと重視すべきではないか？

(3-1)
2000年代まで
三つのタイプ

「教科」と「総合」の関係 三つのタイプ

タイプA

- 「総合」を特設せずに、むしろ「総合」を教育課程全体に浸透させようとする
- 「総合」で実践する問題解決的な学びこそ本来の学び
- 「教科」を否定し、経験活動を基礎にして教育課程を編成
- 小学校を念頭

「教科」と「総合」の関係 三つのタイプ

タイプB

- 「総合」を特設せずに、「教科」を充実・発展させることによって「総合」の要求に応えようとする
- 本来「教科」では、習得した知識を現実の問題解決に活用できるようにさせるべき
- 「教科」を詰め込みのままにして、特設「総合」で問題解決をさせることがおかしい

「教科」と「総合」の関係 三つのタイプ

タイプC

- 「教科」と「総合」の相互還流
- 「教科」における活用（タイプB）を重視しつつ、「教科」の枠を超えていく学びを励ます
- 「総合」を特設することで、「教科」と「総合」の役割分担をする（←タイプA/Bから批判）

(3-2)

2000年代の教育改革と 「探究」のキーワード化

資質・能力に関する国際研究・調査活動

IEA (国際教育到達度評価学会)
TIMSS (国際数学・理科教育動向調査)



OECD-PISA (OECD生徒の学習到達度調査)

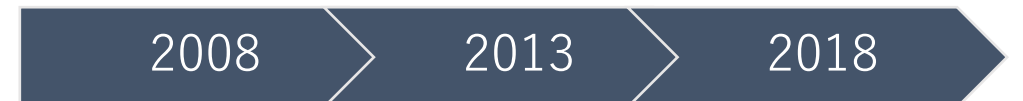


OECD-PIACC
(国際成人力調査)

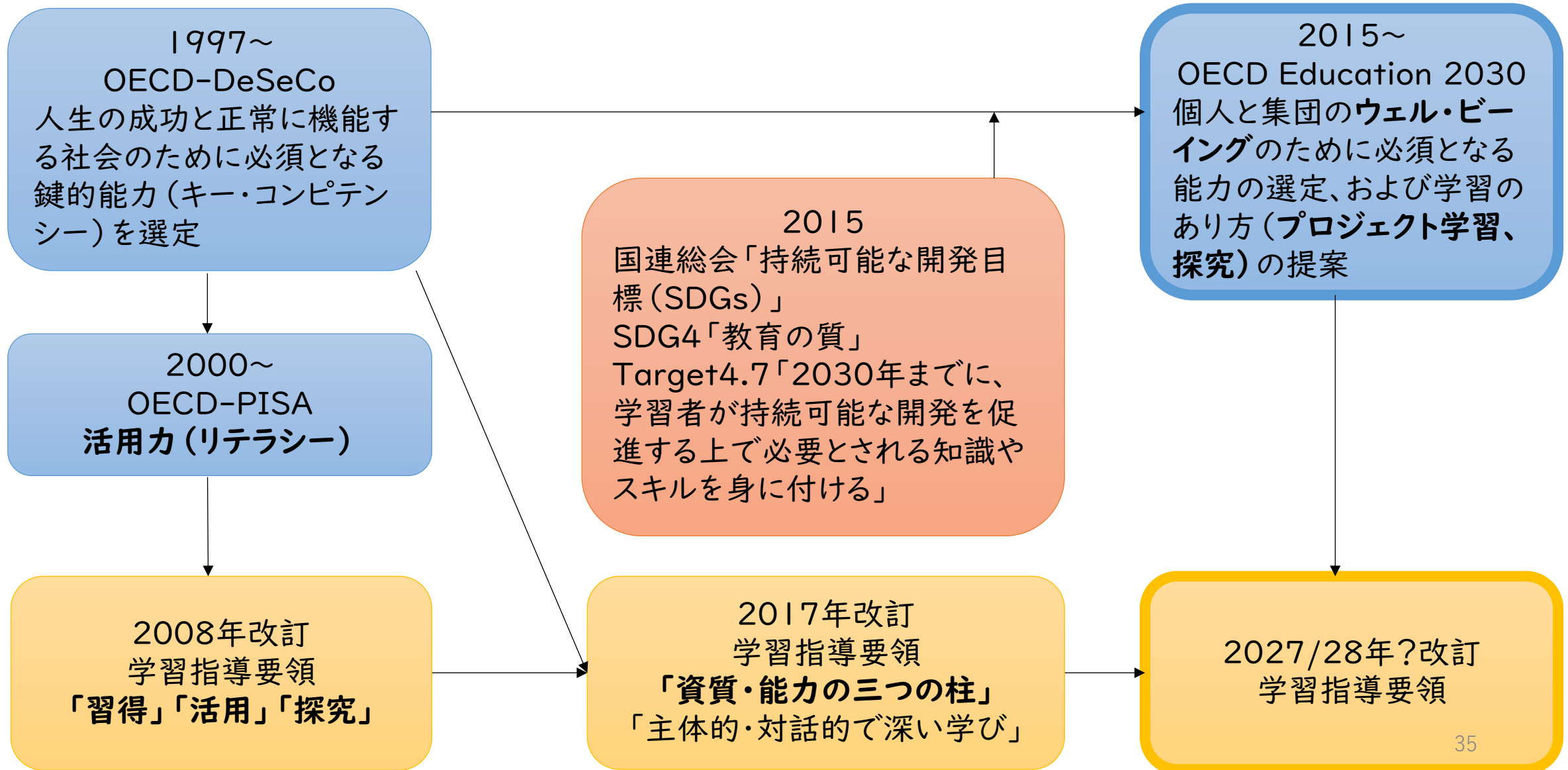


※日本の児童生徒の成績は長期的に安定して良好!!

OECD-TALIS
(OECD国際教員指導環境調査)



2017年改訂学習指導要領とOECD

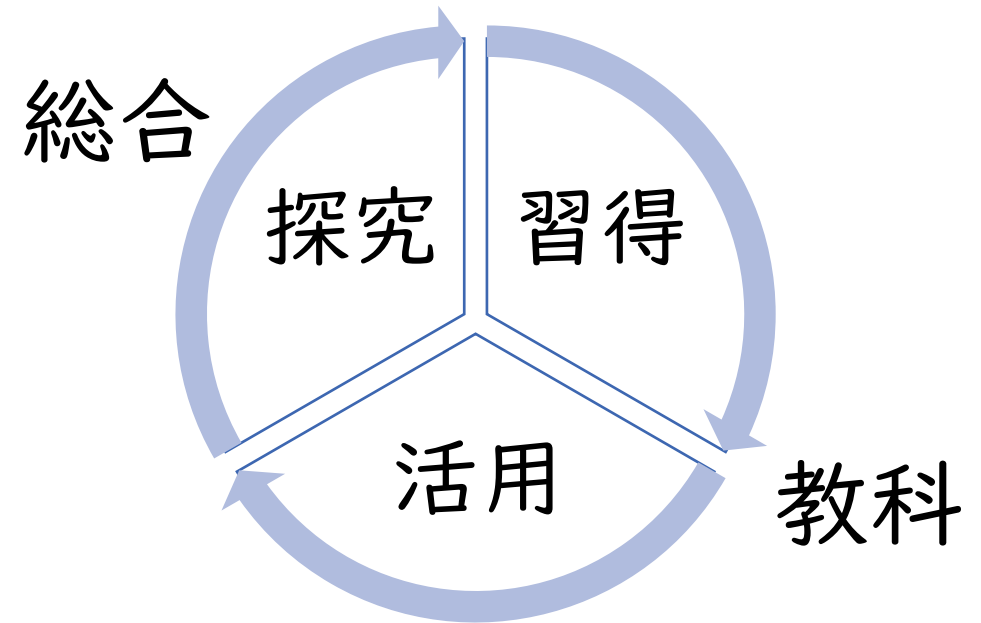


2008年改訂学習指導要領 「習得」「活用」「探究」

- 「習得」「活用」と「探究」の最も大きな違い

- ①「習得」「活用」では多くの場合「問題」を教師が与えるが、「探究」では生徒自身が設定する
- ②問題から結論に至るプロセス全体を生徒主体で行うということ

(松下佳代「中等教育改革と教育方法学の課題-資質・能力と学力の対比から」日本教育方法学会編『中等教育の課題に教育方法学はどう取り組むか』図書文化、2019年)



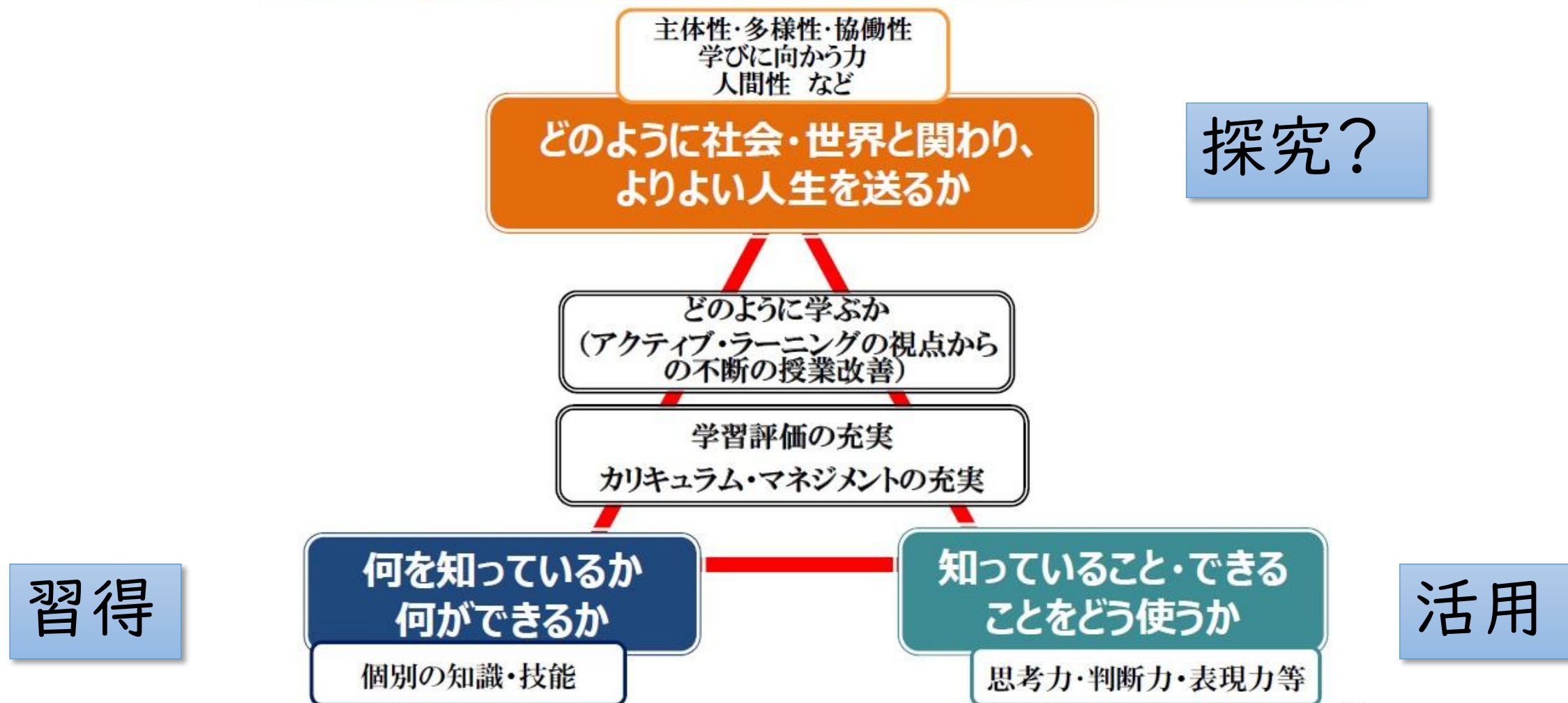
「教科」と「総合」の関係 三つのタイプ

タイプC

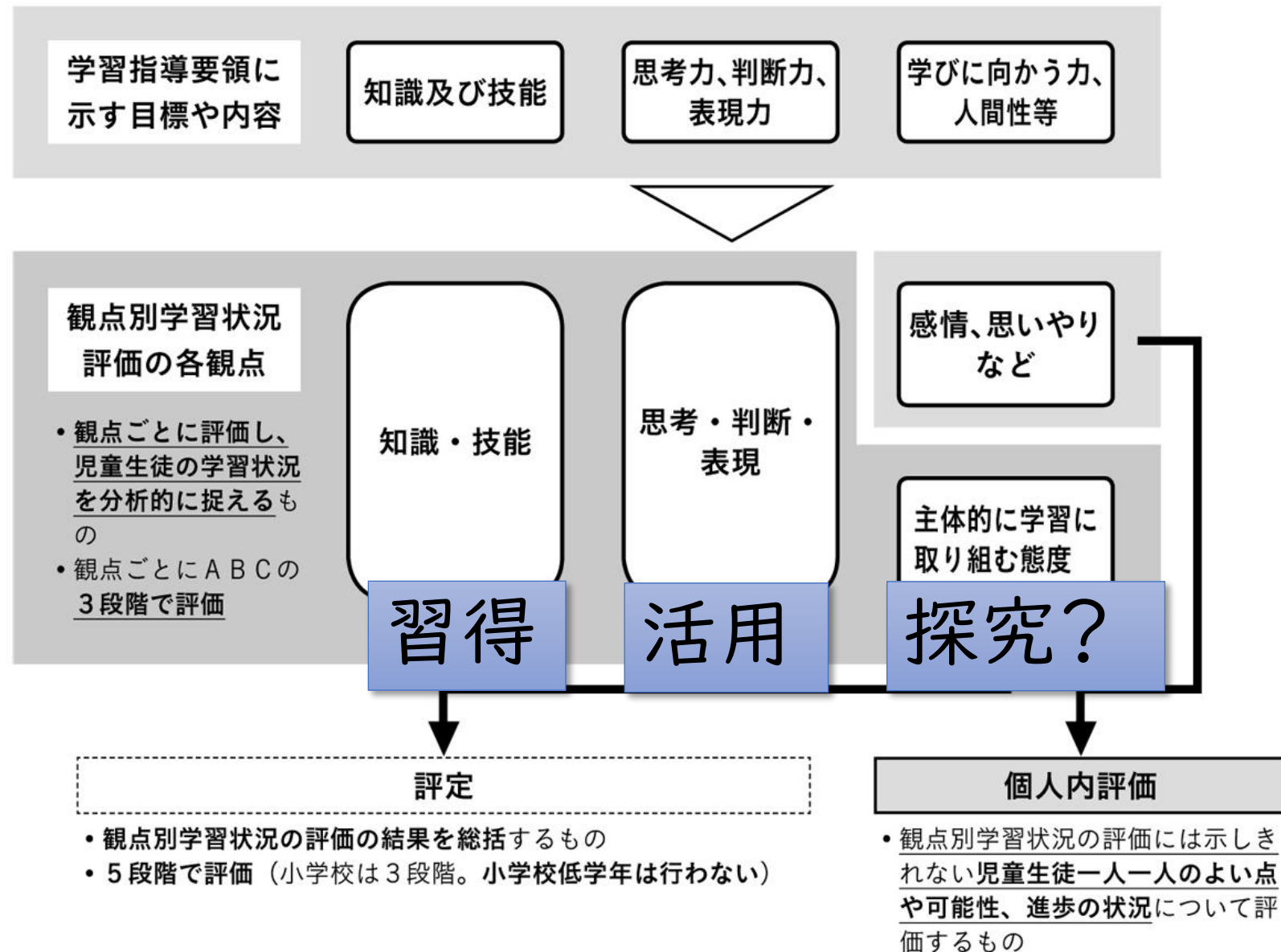
- 「教科」と「総合」の相互還流
- 「教科」における活用（タイプB）を重視しつつ、「教科」の枠を超えていく学びを励ます
- 「総合」を特設することで、「教科」と「総合」の役割分担をする（←タイプA/Bから批判）

2017年改訂学習指導要領 教科における「資質・能力の三つの柱」

育成すべき資質・能力の三つの柱を踏まえた日本版カリキュラム・デザインのための概念



2019年改訂指導要録「目標と指導と評価の一体化」



- 中央教育審議会
初等中等教育分
科会教育課程部
会「児童生徒の
学習評価の在り
方について」
(2019年1月)
より

OECD Education 2030

OECD東北スクール

2011年3月11日 東日本大震災

2014年8月30日 ~31日

「東北復興祭<輪WA>in Paris」

OECD Education2030 フェーズ1

・2030年に向けた、生徒に求められるコンピテンシー等を関係者と協働して導出

→2019「学びの羅針盤」

・国際的なカリキュラムデザインに関する共通原理の分析

OECD Education2030 フェーズ2

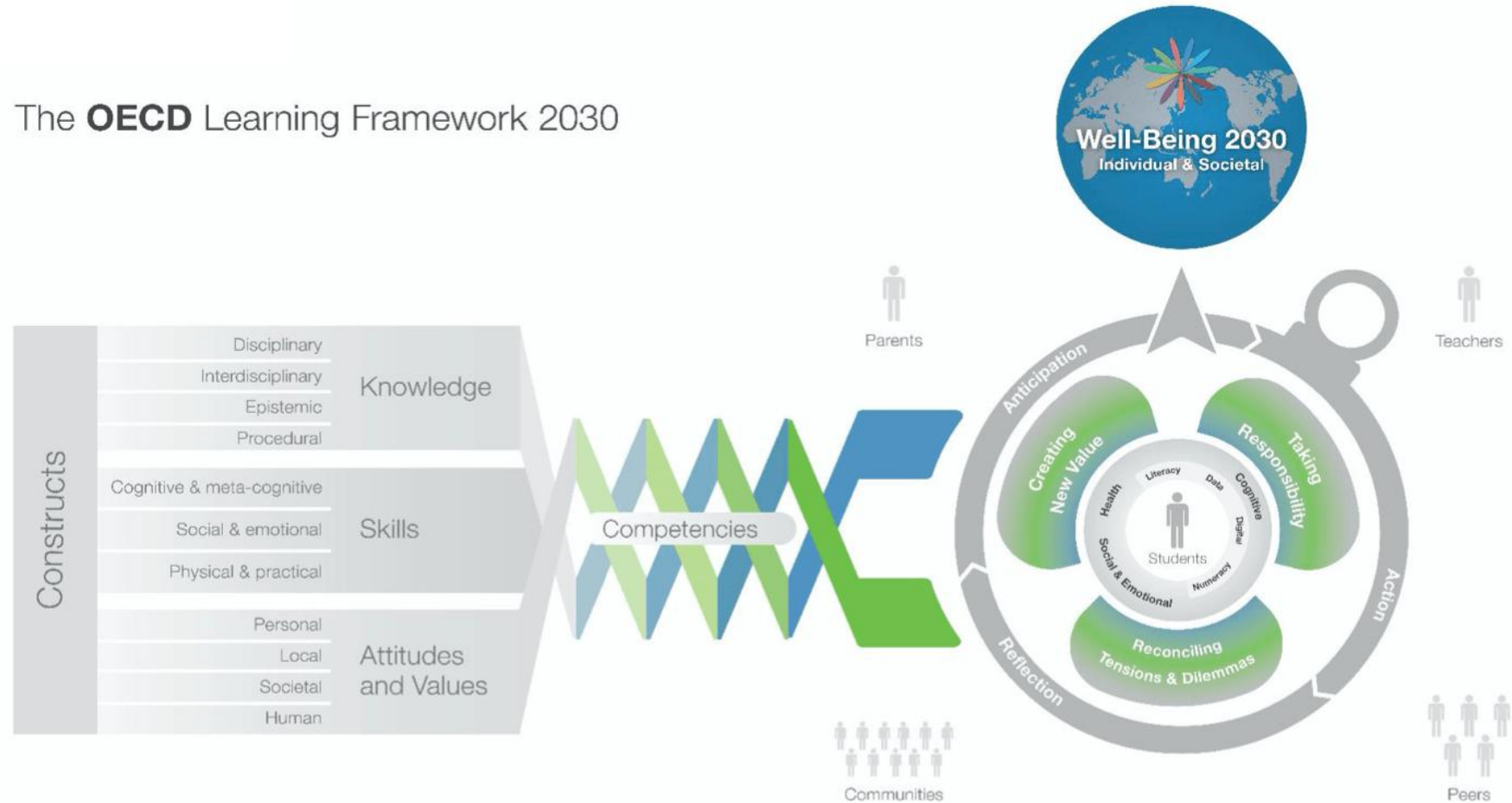
・2030年に向けた、教師に求められるコンピテンシー等を関係者と協働して導出

・カリキュラムの効果的な実施を可能とする共通原理の分析

- ・OECD Education 2030プロジェクトについて[title \(oecd.org\)](https://www.oecd.org/)
- ・白井俊『OECD Education 2030プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』
- ・【資料3】OECDにおけるAgencyに関する議論について.[pdf \(mext.go.jp\)](https://mext.go.jp/)

2019「学びの羅針盤」

The **OECD** Learning Framework 2030



- OECD Education 2030プロジェクトについて[title \(oecd.org\)](https://www.oecd.org/)
- 白井俊『OECD Education 2030プロジェクトが描く教育の未来－エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』
- [【資料3】OECDにおけるAgencyに関する議論について.pdf \(mext.go.jp\)](#)

2019「学びの羅針盤」

- Agency「自ら考え、主体的に行動して、責任を持って社会変革を実現していく力」
- 行動に移すことができるような、知識、スキル、態度及び価値の幅広いセットの必要性
- 私たちの社会を変革し、私たちの未来を作り上げていくためのコンピテンシー
 - 新たな価値を創造する力
 - 対立やジレンマを克服する力
 - 責任ある行動をとる力

(OECD Education 2030プロジェクトについて[title \(oecd.org\)](https://www.oecd.org/education/2030/))

(3) まとめ

- 2008年改訂学習指導要領では、明確な役割分担論だった
教科→「習得」「活用」
総合→「探究」
- 2017年改訂学習指導要領で、教科において「習得」「活用」
「探究」を実施する素地ができた
→教科と総合の役割が曖昧に
- 2019OECD「学びの羅針盤」で探究＝プロジェクト学習がキーワードに
→「探究」のイメージがプロジェクトまで拡大する

今後に向けて

- 改めて、教科と総合の関係をどう描くのか？
- 中学校において
- 学校教育目標の実現を目指して
- 「総合的な学習の時間」を中核としながら
- 各教科を含めた学校教育課程全体を
- いかにマネジメントすればいいのか？

参考文献

- 秋田喜代美・福井大学教育学部附属義務教育学校研究会『プロジェクト型学習 未来を創る子どもたち』東洋館出版社、2018年
- 白井俊『世界の教育はどこへ向かうのかー能力・探究・ウェルビーイング』中公新書、2025年
- 田村知子『カリキュラムマネジメントの理論と実践』日本標準、2022年
- 西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計』図書文化、2016年
- 宮崎清孝『総合学習は思考力を育てる』一莖書房、2005年